

兜跋毘沙門天像成立に見られる 西方文化の包容と大乘思想の具像化

高 橋 堯 昭

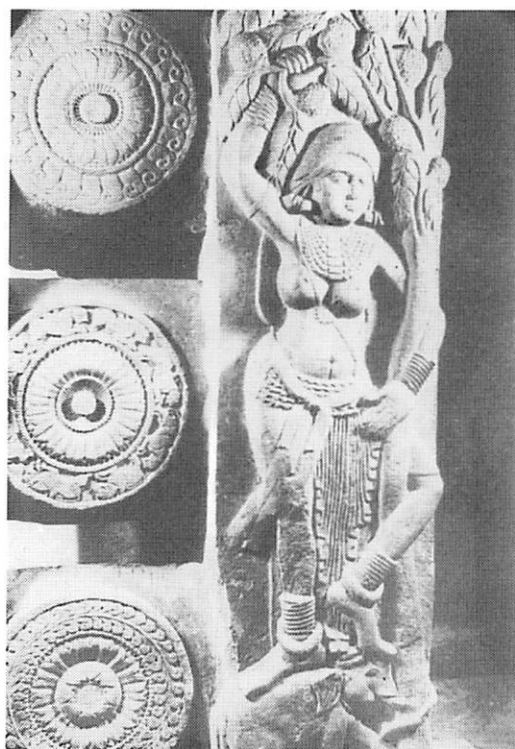


写真1 (カルカッタ博物館蔵)

〔1〕

パールフットやマトウーラになまめかしいヤクシー像が数多く展示されている。筆者は四十年前はじめてインドに行った時、この像を見てカルチャーショックを受けた。こんなみだらとも思える像に果たして仏塔を守る役割が担えるのだろうか。(写真1)

これらの美しくなまめかしいヤクシー像は人間らしきもの、動物、そしていろ

兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化(高橋)

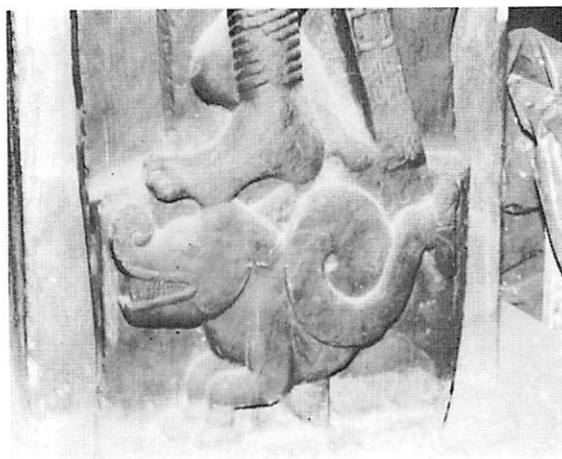


写真2（カルカッタ博物館蔵）

いろの空想上の生き物の上に立っている。（写真2）つまり、大地の

奥深く力強くはった根ともいえるみにくい生きものが上の美しいヤクシーを支えている。共に一体の夜叉といえよう。夜叉とは大地の生命力、モンスーンが来て、からからに乾いた大地が、雨水によって活性化し、そこから、色々の木や草の芽が出、蛇や各種の動物が這い出して来る。こうした現象を先祖代々眺めてきた体験から、こそ万物の始まりと感得して来た。これがリグベータ以来、「はじめに世界は水であった。私（神）は水の中の生命の本質で、あらゆる植物を育む」^①とか「水こそ万物のもと」とか、リグ・ベータやヤジルベータに「空に先立ち、地球に先立ち、水が最初に保たれ、すべての胚芽がその中に存在する」^②と、要するに「あらゆる存在の本質は大地であり、大地の本質は水である」^③という考え方が起こっ

てきたのであろう。

これは生産・多産と言う意味で女性の夜叉ヤクシーの像が多いが、男性夜叉ヤクシーの像もなくはない。その証拠に、両足の間に木の芽が萌出ている像もある。（写真3）共に大地の生命力、活力を意味している。

筆者がこのヤクシャ・ヤクシーから書き出したのは、これが後述の毘沙門天、毘沙門天と言っても二種類ある、即ち邪鬼を足下に組み敷く普通形毘沙門天像や、地天が毘沙門天の足を捧げもつ「兜跋毘沙門天像」のルーツだからで



写真3 (マトウーラ博物館蔵)

ある。

このヤクシャ・ヤクシーが仏教に取り入れられて仏教の守護神たる四天王となる。即ち仏法を東西南北から守る神となる。然し四天王のうち毘沙門天が主神となっていく。長阿含経第六・四天王品に

「毘沙門天王、提頭吒天王、樓勒迦天王、毘樓博叉天王等、与諸小王及諸

眷属圍繞、共入迦毘延多苑中」^①とあるように、毘沙門天王が他の三天王のほか眷属多数をひきつれて遊園に行道する資料からみると主神になっていく。これはガンダーラから出土している「四天王奉鉢」の図(写真4)で毘沙門天王だけが鉢



写真4 (日本個人蔵)

兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化(高橋)



写真5（ベシャワル・個人蔵）

を持つていないことからわかる。なぜなら、他の三

天王が鉢を持つていて、毘沙門天王が持つていないということは、毘沙門天王が一番先に釈尊に奉納し終わっていることを表わしており、毘沙門天が主神の地位になつていたことがうかがえる。即ち、前述の経文をこの彫刻は裏付けていると言えよう。ちなみにこの毘沙門天は遊牧民の服装をしているが、他の三天王はインドの服装をしている。即ち毘沙門天だけはクシヤンの服装をし頭には鳥の羽根をつけている。鳥はペルシアでは我々の魂を天国に運ぶもの、即ち我々を極楽に連れて行く鳥として信ぜられている。然し、この図柄には毘沙門天王は武器を持つていない。武器を持つのは釈尊の「出家踰城」図（写真5）である。釈尊がこっそり城中を抜け出し出家しようとする時、乗馬カンタカ（馬）のひずめの音で城中の人を起こし、出家が妨げられるのを心配した夜叉は地中より出現し馬の足を捧げもつて城外に運んだと言う伝説^⑧。それを先導したのが毘沙門天で、武器を持ち、右手で「こちらへどうぞ」というポーズをとっている。この彫刻で毘沙門天は仏教の守護神としての地位を固めて行つたことがわかる。

〔2〕インドの夜叉クベラはガンダーラではパンチカ

同じ大地の生命力たる夜叉は、インドではクベラ（毘沙門天）、ガンダーラではパンチカと言った。呼び名は違っても本質は大地の生命力・豊穡の力で違いはなかった。仏教がこの地に進出していく時、仏教はこのパンチカを毘沙門天の大將軍として仏教の中に抱容していった。イスラム教やキリスト教の如く、相手を制圧して改宗を強要するのではなく、仏教はこうして相手を立てて異教徒が自然に仏教に関心を持つて来るように仕向けるようにして自然自然



写真6 註6の写真より



写真7 註6の写真より

兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化（高橋）

のうちに仏教の中に包容していった。まさに仏教の包容性寛容性躍如といったところであろう。

さて、ガンダーラにはアレキサンダーの侵入以来ギリシヤ人をはじめとしてベルシヤ人そしてクシヤン等の外来民族が相次いで進入し、それらが共存する普遍的世界をなしていた。即ちクシヤンの王、カニシカ・フヴィジカのコインに三十数種のギリシヤ・ベルシヤ・中亜・そしてインドの神々の像がミント（彫られて）されて使用されていた。®
現代のように、「そんな穢れた神のついたお金なんて手にしたくない」というような偏狭な考え方なら、到底それが

擦りされるまで使われるような事はなかった。このような普遍性寛容性が当時にはあった。

写真8 スワット出土（筆者蔵）

ここで問題とする西方の火の神（ファロー）や、木の芽の萌え出ずる動物の角、即ちコルヌコピアをもつたアルドクシヨゝ等々の神が外来人によって信仰されていた。特に外来人によって信仰されていた最たる神は、ファローと言う火の神である。

沙漠では灼熱の太陽が大地を焦がすと、水蒸気が上昇し雲となり、雨を



写真9 焔肩仏（ギメー博物館蔵）

ら水」の図式を端的に表現したのが焔肩仏である。即ちこの写真（写真8）のように「火が法衣を着た仏」の両足から水が出ている。そしてギメー博物館蔵のアフガニスタン出土の「焔肩仏」（写真9）が肩から火を出し足から水を出す像は、この沙漠の風土と文化を示しているといえよう。

（3）神も一人ものではだめ

兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化（高橋）

降らし牧草を育て人々を豊かにする。これを体験して来た人々には「火」を第一とする文化が生まれた。カニシカのコインに全身火に覆われて火の皿を持っているフアロー神の図（写真6）と、巾着を持っているフアロー神の図（写真7）の二種類がある。これはまさに一つの神の両面を表わしたものである。まさに火から雨、そしてそれによって牧草が育ち羊を太らせ人々を幸福にする、この「火か



写真10（タフティバイ出土 大英博物館蔵）

インドの文化では神も神妃を持つ。シバ神もカリィとドルガの妃を持ち、これによって一層神力を発揮する。かくてインド文化の影響を受けてもとは単体であったバンチカとハリティーと、ファローとアルドクシヨの夫婦像が出来た。次の三枚の写真を見ていただきたい。

写真10の双神像はギリシヤ的な容姿をもっている。即ち女神は福よかな肉体とギリシヤ的な服装。コルヌコピアといって木の芽の萌え出する動物の角をもつ。

男神の方はスカート風のズボンとロングソックス。胸にはワインの皿。後ろの肩

の所にいる侍者は錢袋を持っている。明らかにファローとアルドクシヨの像である。にも拘らず、このアルドクシヨの足元には子供がまつわりついている。明らかにこのアルドクシヨにはハリティー（鬼子母神）の意味も含んでいることになる。

写真11はこれとそっくりである。然し巾着を持った男子は前の写真の如くファロー神の姿である。然しこのファロー



写真11 ベンジャワル博物館蔵

神の髪の毛の上には鳥の羽根飾りが付いている。「四天王奉鉢」の毘沙門天の頭に鳥の羽根が付いていたように、毘沙門天の大將軍となるパンチカの頭の上には鳥が付くから、このファロー神は、同時にパンチカであるということになる。

更に写真12の女神は大きな乳房に子供を抱き、子供が膝のところに手を差しのべているから、明らかにパンチカとハーリティーの像である。にも拘らず、この女神の頭の上には大きな蕾の飾りを付け、男神の髪飾りにも木の芽や蕾が付いている。足元の台座には大勢の人々がダンス

をしている。これまたギリシャのバックカスの祭典である。まさにファローとアルドクシヨーがこのパンチカとハーリティーとオーバーラップしている図である。

これらの三つの彫刻は共に仏教の塔や僧院から出土している。このことはこの双神像はパンチカとハーリティー

(毘沙門天の大將軍と鬼子母神) 以外である筈はない。更に碑銘^⑧から考えると、ギリシャ人やペルシャ人等の外来の

兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化(高橋)



写真 12 サリペロール出土（ペシャワール博物館蔵）

の像をパンチカとハーリティーの像とし、外来の異民族の人々は自分達のフアローとアルドクショーとして見たということになる。このように一つのことを両方から別の名で呼び合っている。これを「習合」という。こうしたことがまかり通っていたということは、この異民族雑居の普遍的世界ではこうした寛容性があつたことがわかる。特に仏教の塔や僧院に、こうした外来のギリシヤ的な像を安置することを許したということは特筆すべき事柄であり大いに誇るべき事実であると思う。

人々で仏教に帰依する人も多かったと考えられるので、これら外来の人々は、自分達が信仰していた神々をもってガンダーラに入って来たから、この双神像に自分達が信仰していた神、即ちフアローとアルドクショーをこの像に見るのである。一方ガンダーラに住むインド系の人達は、この仏塔に彫られた双神像をパンチカ（毘沙門天の大將軍・のちに毘沙門天と区別が付かなくなる）とハーリティー（鬼子母神）を見ていたことになる。従って、ガンダーラのインド系の人々はこれら

特にガンダーラの仏教に帰依した外来人は、否、インド本土から遠くはなれ外来文化の洗礼を受けた住民も、インド仏教の出家とかニルバーナ（無）を求めたのではなく、現世的欲望の充足、それがかなわないまでも、来世の「至福」を仏に祈った。そこでは仏陀はもう生身の仏陀ではなく、超越者救済者になっていたから彼等はそれを仏に祈った。特に現世的な欲望を持った外来人は、とりわけこの時代はシルクロードの通商の隆盛期で法華経や阿弥陀経に金銀七宝という表現が随所に出、又商人長者の物語がこれまた多く出ているように、金銭的欲望が殊の外強かった時代だったし、更に加えて現世的欲望が満ち充ちていた東西通商の中心地ガンダーラなるが故に、巾着を持った神々が赤裸々に当時の様相を示しているといえよう。

（4）ガンダーラに愁風

こうしたガンダーラの隆盛が盛んであればあるほど、その衰退の風は冷たい。その隙間風についてササン朝ペルシャや白フンの侵入と仏教寺院の破壊に現地の人々は、ひしひしと末法の到来を感じたことであろう。

この雰囲気を反映して、パンチカ（毘沙門天）は平和な夫婦像から又単独像となつて、豊穡の神より、むしろ守護神の傾向を強くして来た。この風潮を示すものとして、タカール出土の武器を持つパンチカの巨大な像（写真13）の出現である。

かくしてパンチカ・毘沙門天はますます守護神としての傾向を強くしていった。その資料としては、

- ① 大唐西域記卷一迦畢試国（カプール北東、クシャンの夏の都カピシ）の所に、「仏院の東門の南に大神王の像があり、その下に宝が蔵されていた。そこへ近くの王が攻め入った。すると、「神王の冠の中の鸚鵡鳥」が羽を震わせ兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化（高橋）



写真 13 タカール出土（ラホール博物館蔵）

た⁴⁰とある。

この文章で考えられることは、毘沙門天王が納縛、即ち新僧院の中に単独像として祀られていたことと、槍で胸を突き刺すように武装していたということである。

③ 更に同じく大唐西域記の瞿薩旦那国の条に「数十万の匈奴が掠辺城を寇そうとした。するとその夜大量のネズミが出て、弓の糸や鎧の糸を齧み切った。その大将を殺し、兵を虜とした。（鼠皆齧断、殺其将、虜其兵、匈奴震⁴¹）」とある。（チベットのタンガには毘沙門天は大きなネズミを抱いているのもこうした伝統から来ているのだ

大声をあげ、大地を震動させたので王及び軍人は辟易して……⁴²とあり、

② アフガニスタン北部のバルフ（現在のマザリシャリフ）の「縛喝国の納縛僧伽藍」では次のように書かれている。即ち「突厥の王が伽藍を襲い珍宝を取ろうとして近くに野営した。その夜毘沙門天王に長い戟で胸を突き刺される夢を見た。そこで衆僧にお経をよんでもらって懺悔しようとしたが、時既に遅く、伽藍内で没し

ろう。(写真14)

④ これは又毘沙門天王儀軌にも同じ話がある。即ち金色のネズミは弓の弦をかみ壊して使えなくするとあり「金鼠咬弓弩弦。及器械損断尽不堪用」、又「宋高僧伝」巻第一「不空伝」に金色のネズミが弓の弦をかみ(使えなくする)、また北門の塔に光明天王が現れる、「有鼠、金色呿弓弦皆絶。城北門楼有光明天王」とあり、更に帝は諸道に勅して、城楼に天王像を置くことを命じた。⁴³と毘沙門天王が守護神として信仰されていたことがわかる。即ちこれらの資料から毘沙門天はヒンズークシ周辺で守護神化し、タクラマカンの沙漠で完全に守護神となっていた。

(5) タクラマカン沙漠の風土

兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化(高橋)



写真14 チベット・タンガ 筆者蔵

沙漠とはどんな所だろうか。筆者は沙漠の豪雨に遭遇する幸運な体験を得てきたが、灼熱の太陽が大地を照らすと水蒸気が上がり、それが集まって雲となって雨が降り牧草を生育させる。すると人々を豊かにさせる。為に沙漠では火が水をさそうという現実から、「国王の本質は火であって、天から火柱となって地上に降下する」という火の信仰が起こることは前述した。これは中央アジアの沙漠だけの事ではなく、西アジアの沙漠に起こった宗教のヤーベ神や



写真 15 大英博物館蔵

パール神とも同一の考え方である。かく沙漠ではあくまで天の日が主である。

これを象徴するものが前述のカニシカのコインである。即ち、火が雨を呼び、牧草を育て、人々に富を与えると云う構図を示している。

これは又仏像についても言える。筆者の所蔵の恰も火が法衣をまとったようなこの像（写真8参照）の、足元には水が流れ出ている。又ループ

ル博物館蔵の焰肩仏の「肩から火が出、足元から水が流れ出ている」（写真9参照）、これはまさに沙漠の風土を表わしているものである。かくて沙漠の主となるものは火という「火の文化」が表れてきた。

従って、仏教が沙漠に入っていくと、「水の文化」から出た毘沙門天は、体から火を出す火の神の性格を併せ持



写真 16 大英博物館蔵

つものに至る。この大英博物館蔵の敦煌出土の行道天王の像（行道天王という神があるのでなく、四天王のうち他の三天王をひきつれて毘沙門天王が遊園に行道するという意味の図である（写真15））にも、炎々と火が出ていて円光背をなしている。又体からペルシャのササン朝の王の如く薄い布をたらしめているし、前述の如く頭には「鳥」の羽をつけている。まさにペルシャ文化の影響である。

敦煌出土の像（写真16）も薄絹をつけ、頭に鳥の羽根をつけていることである。やはり火が円光背のようになっていいる。特に注目されるのは「よつんばい」になっている奇怪なものをふんまえている。まさに邪鬼をふんまえる毘沙門

兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化（高橋）

天像であろう。スタインがホータンのダンダン・ウイリク寺址で外套様の鎧を着し、邪鬼を踏み負かす武人像（七世紀）を発見した。この像は祠堂内部の隅に安置されていたとあるのは、沙漠の厳しい自然の環境の中では外敵や悪運を屈服させる悪鬼をふんまえる姿の守護神的な像が出来たのは自然なことであつた。

（6）地天の上に立つ毘沙門天像（写真17）



写真17 （大英博物館蔵）

邪鬼をふんまえ外敵や悪運を調伏する像の出現と共に、もつと信仰的にも思想的にも進んだ兜跋像が出現してきた。これについて言及せねばならない。金光明最勝王經卷第八「堅牢地品」に、毘沙門天王を捧げもつ地天は毘沙門天の御足を捧げ持ち毘沙門天王を守護し奉ります「我以神力、不現本身、在於座所、戴其足……我当昼夜擁護是人、自隱其身、在於座所、頂戴其足」⁴⁹と地天は自らの意思で毘沙門天の御足を捧げもつ

ていて、普通形毘沙門天像の如く神にくみしかれた像、即ち他動的に組み敷かれたものと違う。この点が邪鬼を組み敷く像と根本的な違いである。

然も、金光明最勝王經四天王護國品第六には「我は身を変え、小児の形になり、或いは老人や比丘の像になり、手には如意末尼宝珠や金甌を持ち、口に仏の名を唱え、呪をとなえるものには、皆願いをかなえよう。又たとえ日月が地に落ちて、大地が動いても、この経王をとなくて呪を誦すものには貧困や苦悩から離れしめ大利を得させようと、私は仏にお誓いたします」と仏に向かって誓いを立てている。

いわばこの兜跋像というものは神と地天の二重の誓願の上に立っている。

不空訳の毘沙門天儀軌の「毘沙門天が安西城門上に出現した」という話も、この神の「誓願」と、これをひたすら「信」ずる衆生との関係を示すものに他ならない。

即ち、①夷敵狹が攻囲する ②経を誦すると神兵が現れる ③蕃部は驚き潰えた ④金色の鼠が現れ武器の糸を嚙で使用不能にした ⑤城樓に光明天王（光を放つ毘沙門天王）が現われ蕃兵の逃げるのを怒視した。この話の根本は「経を誦す」こと。誦すとはひたすらすがりつく信の表現である。法華經の「たとえ一句でも受持誦し解説書写する」という信である。然も信とは仏の誓願を信することである。これが最前提となっている。

為に「上求菩提」の小乗の立場ではなく、「下化衆生」の大乗への飛躍があり、これありてこそ、この地天が捧げもつ兜跋形の毘沙門像の成立があったと言える。

筆者はこの地天と毘沙門天の姿に五十年間もお仕えしてきた。その五十年の思いは、この地天こそ我々人間の信を投影したものであると。

兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化（高橋）

(7) 上からの救いの御手と下からすがりつく衆生の願い

人間は一人ではさみしい。大いなるものと一緒でないと不安この上もない。この有限な人間が神と一緒になろうとするその信、これこそ地天の思いそのものである。これを証するものとして二つの絵像がある。デリー中央アジア博物館の毘沙門天（写真18）の下に屈強な人物が嬉々として神を支えている。そこには邪鬼が毘沙門天にふんまえられて苦痛の表情を示すのと本質的に異なるものと考えられる。

更に、ホータンのカダリク出土の絵像（写真19）には、地天は神の御足を捧げもち、その下の人物二人（下の人物は写真のスペース上カットしてある）は神に向かって合掌している。他動的に神にふんまえられる邪鬼と違って本人の意思で神を支えもっている。この点が違う。

啐啄一如の譬えの如く、即ち卵の中
の鳥が成長して殻から出ようとする時、卵の内側からコツコツと殻をつつく、それを合図としたように親鳥は嘴をもつ



写真18（デリー・中央アジア博物館）



写真 19 (stein Sesindia PL.XCL)

ホータン周辺、ここは華嚴経が完成したところというより、支婁迦讖・支謙・支曜等の訳経僧達が多クシヤンの地からシナに経文をもつて、オアシス伝いに通つた所。特に僧達の宿泊する所は寺、そこで僧達は寺僧や信者に大乘の教えを説いて行つた。為にこれらのオアシスの町には新しい思想が伝わつていた。こうした大乘の教えは、下から解脱の道をのほつていく小乗の教えに対して、仏陀が誓願を以つて慈悲の御手を垂れ、衆生はこの慈悲の御手にすがりついて行く。この、仏の誓願の御手とすがりついて行く衆生を上から引き上げてくれる慈悲の御手。これが結びついていったのが兜跋形毘沙門天の精神である。

兜跋形毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化（高橋）

て殻をうち破つて子鳥を出すように、衆生は神にすがりついて行くと、神は救いの御手を垂れてくれる。金光明最勝王經の如く、神は誓願を以つて衆生を救わんとする。上からの救いの御手と、下からの救いを求める、その両者の御手が結びつく、これが兜跋形の毘沙門天像である。この像の成立の場所は、ラワクやカルダリクの仏教遺跡のある

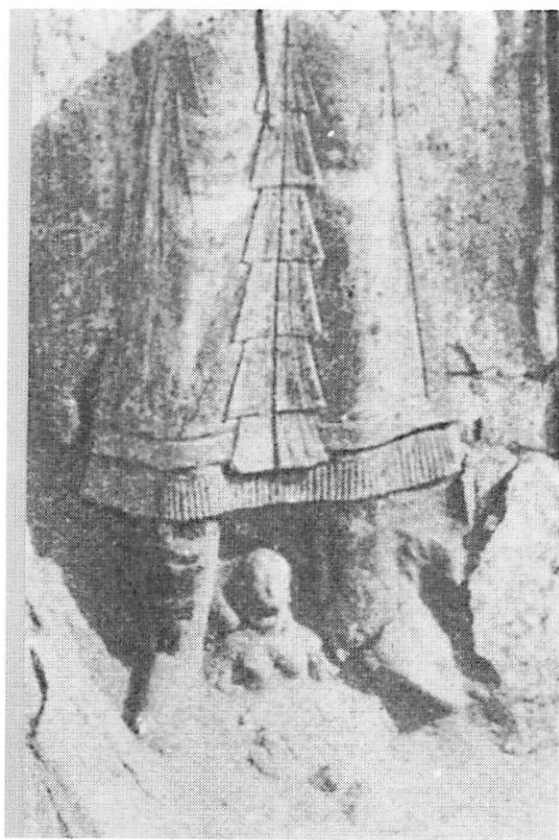


写真 20 (Ancient klotan XIV.C.)

の精神が非常に多くの人に受け入れられ、その精神を具象化した図像が求められたと考えられる。強いて言えば、大乘仏教の思想を具象化したものこそが兜跋毘沙門天の像であるのだ。

むすび

パールフットやマトウーラの美しいヤクシー、その下にうごめく奇怪な生き物。動物のようなものもあれば人間の

普通形と兜跋形。図像としては似ているが、その中にこめられた精神には大きな違いがあることを記してきた。兜跋形の萌芽ともいえるラワクの像（写真20）があつた仏塔は、スタインによれば五・六世紀のものとされる。ではなぜ七世紀に兜跋形の完成を見たのか。義浄が金光明最勝王經を訳出したのは六百年代の後半からだから、この原典の成立はそれ以前。六世紀末から七世紀にかけて大乘仏教

ようなものもあり、中にはガヤ出土の彫刻のようにヤクシーの足を支えているものもある。これらはみんな大地の生命力、即ち夜叉というもの。この夜叉が同じヤクシーを支えていることは、ヤクシーは夜叉の棟梁といえるもの。

これらが長い時間と遠く離れたところで成立した毘沙門天像のルーツとなるものと考えられる。

これらの美しいヤクシー像は豊穡の神、生産の神として人々から信仰されてきたが、仏教の成立と共に、釈尊やその説かれた仏法の守護神としてパールフットやマトウーラの仏塔を美しく飾ってきた。

而して、この夜叉の四天王のうち、毘沙門天王だけがガンダーラで主神になっていく。ガンダーラはインドより北方だから北方守護の毘沙門天が中心になっていったのであろう。即ち、長阿含経世紀経に毘沙門天王が他の三天王をひきつれ楽園に行道する文章や、四天王奉鉢の彫刻がこれを証している。

然しながら、豊穡の神としての毘沙門天王が守護神化していく。なぜなら、沙漠は厳しい、特にその中に点在するオアシス国家は弱小。これに強大な遊牧国家が襲って来たら、ひとたまりもない。これがアフガニスタンのカピシヤバルフ（マザリシャリフ）そしてタクラマカン沙漠のオアシスホータンでの毘沙門天が守護神となっていく姿がいろいろな経典の中からうかがわれる。

更に、毘沙門天はインドのモンスーンによる大地の活性化、即ち水による豊饒化にそのルーツをもつ。その毘沙門天王は、沙漠に入ると沙漠の文化を取り入れて来る。沙漠の文化は火の文化である。灼熱の太陽が大地を焦がすと、水蒸気が上り、それが雲となって雨をもたらす。雨によって牧草が育ち人々に豊かさを与えるのだ。その火の文化を毘沙門天王は併せもって来る。即ち毘沙門天王が火や薄布、そして人々を幸福の世界に導く「鳥」等沙漠の文化を毘沙門天は身につけて来るからである。かくて毘沙門天は水と火の文化、そしてその力を併せ持つ強力な神となっていく

た。

然して、強力な守護神となった毘沙門天は悪鬼・邪鬼をふんまえる毘沙門天王の像となる。敦煌出土の像のように、悪鬼・邪鬼になぞらえる外敵病氣そして悪運を退散せしめるという意味をこめた像である。

これと同時（六、七世紀）に又地天の上に立つ像も成立してきた。何分弱い人間、神と一緒にいれば安心この上もない。恰も幼児が母の懷に抱かれればすぐ泣き止むように。これは普通形（邪鬼をふんまえる）の像とは本質的に異なる兜跋像である。我々人間が神に向かつて救いを求める、その声を聞いて、この上からの救いの手を垂れてくれる。神は「衆生を救おう」という慈悲の誓願を持っているからだ。かくて「下からすがりついて行く衆生の願いと神仏の慈悲とががちり結びついた」特異の像が兜跋像である。

これは上求菩提の小乗仏教ではなく下化衆生の大乗仏教の精神である。いわば兜跋毘沙門天像というものは、この大乘の精神の具象化、大乘の心を形として表わしたものと言えよう。特に当時の信仰はニルバーナとか悟りというもののより、阿弥陀仏への信とか或いはバガバットギーターのバクティ「誠信」に主点が置かれていた。こうした傾向に対応して、ヤクシャ・ヤクシーへの信仰が大乘仏教によつてここで復活し、兜跋毘沙門天という信仰に結実した。かくてこのユニークな像の成立を見たものと考えている。

注

- ① バガバットギーター(VII-8, XV-13)
- ② R. V. (X-82-5), Y. V. (IV-6-2)
- ③ Satapatha Brahmana VII-4-1-8

- ④ 大正・1・三四〇a
- ⑤ 方広大莊嚴經出家品(大正3・五七五c)
 仏本行集經第十七捨官出家品(大正3・七三二c・七三三a)
 普曜經第四出家品第十二(大正3・五〇七b)等々
- ⑥ Rosenfield, *Dynastic Art of Kushan* 664 Huvishka and the Kushan Pantion
- ⑦ 静谷正雄インド仏教碑銘目録 No.1730,1762,1775,1778,1781,1788,1803 等に外来人らしい人名が仏塔に奉納
- ⑧ ペシャワール博蔵カニシカ舍利器に「この寄進が全ての人々に至福をもたらさんことを」の銘文
- ⑨ 大正51・八七四a
- ⑩ 大正51・八七二c
- ⑪ 大正51・五四四a・b
- ⑫ 大正21・二二八b
- ⑬ 大正50・七一四a
- ⑭ Widengreen *Les Religions de L'Iran 1959* P245
 (田辺勝美氏 カニシカ一世金貨の国王立像考―焔肩の起源と意義―(仏芸一五六号 六〇頁)
- ⑮ 北進―「毘沙門天像の変遷」 小学館世界美術全集15 中央アジア 一九九九
- ⑯ 大正16・四四〇a・c
- ⑰ 大正16・四三一c
- ⑱ 大正21・二二八b

兜跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具像化(高橋)